

語学科目におけるオーディオ副教材の研究開発

大塚 秀高

I 序

語学科目を教室でなく、放送を利用して教える場合、エクササイズ
の不足をいかに解決するかが、学生の脱落率を低く押えるための
キー・ポイントとなろう。その意味から、番組とテキスト（印刷教
材）以外の副教材が準備されることが望ましい。スクーリング（面
接授業）はこの問題を解決する有力な手段たりうるが、すべての語
学科目にそれが開設されるわけではないし、また学生のすべてがこ
れに参加出来るわけでもない。そもそも面接授業は放送を利用した
遠隔教育という理念からは対蹠的な位置に立つものであり、これに
多く依存することは、放送大学のよって立つ所以のものを突き崩す
恐れなしとしない。もちろんこのように述べたからと言って、面接
授業の効用を否定しようと言うわけではない。ただ面接授業に頼れ
ば頼るほど、放送大学と既存の大学の区別がなくなってしまうこと
を指摘したかったにすぎない。そのような結果を意図しての面接授
業重視ならばそれも良い。それはオープン・ユニバーシティーがチ
ューターやスタディー・センターに力を入れ、アメリカ、カナダの
放送を利用した大学が電話回線とコンピュータを利用したりするの
と同様、放送大学の前に開かれた選択肢の一つであろう。しかし日
本には日本の国情があるし、放送大学には放送大学の行き方もあろ
う。いたずらに情報に振り回されることなく、必要かつ最適なもの
を見分けてゆかなければなるまい。しかしこれとは別に、試行と研

究は常に二歩先を見て進めてゆくべきものであり、放送教育開発センターにおける試行と研究とはそのようなものであると、筆者は常々思っている次第である。

以下は1984年度の学習方法研究班の研究の一環として、「語学科目におけるオーディオ副教材の研究開発」というテーマのもとに行った研究の研究報告である。参加者は放送大学の平松圭子助教授、埼玉大学大滝幸子講師、それに大塚である。

Ⅱ 研究の考え方・目的

放送大学では、ラジオのみを通じて講義が行われることになっている、いわゆる第二外国語一中、露、西一は、一個学期にテキスト二冊分30講が放送され、わずか15週の間に入門から相当な程度にまで学力を向上させることが要求されている。相当な程度とここで言ったのは、筆者が中国語以外に対しては的確にそれを判断する能力を持ち合わせていないからであるが、こと中国語に限っては、一般大学の第二学年終了時点のそれよりも高いものが要求されているようにさえ見受けられる。放送大学は他の大学と何ら変わりのない、歴とした大学であるからして、程度が高いこと自体には何の問題もない。しかしそこへ到る過程にとられる講義形態が一般大学とは大幅に異なるし、学生も入試によって選考された同一レベルの集団ではないのであるから、大学の教室での講義と放送番組とを同じように考え、一般大学の学生にもついてこられない者がいるのだから、放送大学の学生にそういうものがいても何ら不思議はない、といった考え方を取るべきではないであろう。実際の放送大学の学生が、この15週30回の講義で他の大学では二年間で学習するほどのレベルに達し、試験に合格出来るか否かの結果はもうしばらくすれば出るわけだが、実験放送のモニターの受講状況の推移や、

これに徴した意見から見て、そうそう甘い期待を抱くことは出来ないように思える。しかし大学レベルの教育であるからして、その内容を下げることが考えられない。であるなら、やる気さえあればついて来られる仕掛を考えてやる必要があるように思える。オーディオ副教材というのも、そういう発想で考えられたものである。

オーディオ副教材というと厳めしく感ずるが、要するに録音テープを教材としたものである。ソノシートでもレコードでもよかったのだが、一番普及度が高く、かつ利用勝手がよいのが録音テープだったということに過ぎない。研究対象とした科目は1984年度ラジオ大学講座の「中国語講読編」で、録音テープには講読編15講の本文を二度、一度目は普通よりややゆっくりと通して、二度目は一節ずつ句切って更にゆっくりとネイティブ・スピーカーに吹き込んでもらった。また放送では時間の関係で触れることが出来なかった練習その他本文以外の課文も同様に録音してもらった。しかしこれだけに終わっては通常のテープ教材と何ら変わりがなかろう。

今回のオーディオ教材の特徴は、一講ごとに、その回の本文に即した問題を中国語でネイティブ・スピーカーに吹き込んでもらい、テキストに同封した回答用紙を返送するという形の通信添削指導を盛り込んだことにある。しかもここで特筆しておくべきは、この通信添削指導用の問題がテキストに載っていないのみならず、番組でも一言半句言及されていないことであろう。通信添削指導を受けようとする者は、このテープを繰り返し聞いて問題に取り組まざるを得ない。いわばテープを利用し、聞き取りと作文を兼ねた通信添削指導を実施したわけである。

Ⅲ 研究の対象

この研究を実施した対象は、1984年度ラジオ大学講座「中国語講読編」の受講モニター237人である。しかし予算の関係から、テキストと同時にオーディオ教材一式を送付した特別モニターは200人であった。237人からの選択は、東京地区以外については全員を、最も応募者の多い東京地区については残った定員枠200人になるまで先着順に採用することとした。この結果、東京地区は99人の応募者のうち37人が選に漏れることとなったが、もともとこの受講モニターは200人が予定されていたものであり、こうした措置もやむをえないものと言えよう。結果的には東京62人、千葉47人、埼玉32人、神奈川32人、群馬10人、その他17人がこの研究の対象、特別モニターとなった（その他の地域は栃木4人、茨城12人、宮城1人である）。一体この研究はこうした副教材を送った方が送らないのに比べ、成果が上るに相違ないとの確信にも似た気持ちから企画されたもので、コントロール・グループを作り、それとの比較を行いつつ研究を進めることなどはまったく念頭になかった。それは筆者が教育学の研究者でもなんでもない、一介の中国文学の研究者に過ぎないことから生じる限界がなさしめたものであるが、この32人が図らざるコントロール・グループとなったわけで、選に漏れたモニターの方にはお気の毒ではあったが、その点では大いに比較研究に役立ってくれた（なお筆者は企画、立案を済ませた段階で在外研究員として中国に半年間留学したため、この決定は研究協力課においてなされた）。

Ⅳ 研究手順

この研究を開始するに当たっては、一に通信添削指導用の問題を

作成すること、二にそれをネイティブ・スピーカー——日中学院、相模女子大学、大東文化大学等で中国語の講師をしている葉君海さんに今回ネイティブ・スピーカーの役割と問題出題のお手伝いをお願いした の協力を得て録音することが必要である。この二つの作業はともに主任講師である平松先生の手を煩わせた。1984年度のラジオ大学講座の一つとして、8月から「中国語講読編」を放送するため、そのテキストを執筆中の平松先生には多大な負担を強いることとなったが、この作業は平松先生抜きには考えられないものであり、このような結果となってしまった。もともと筆者の心積もりとしては、筆者も協力し、或は平松先生に代わって問題を作成するつもりであったのだが、筆者の留学の時点でテキストが出来上がっていなかったため、このような結果となってしまった。前々からそうした意志を表示し、分担して作業を進めるべきだったかと反省をしている。従って筆者のこの面での役割は添削指導者として大滝先生（筆者と大学での同期で、中国語学を研究し、大学院博士課程を単位取得退学し、現在埼玉大学非常勤講師をしている）を選び、前もって回答用紙を作成し、平松、大滝両先生と事務手続きを行うセンター研究協力課との間の連絡を行ったにすぎない。

問題を見ずに回答欄を作成した必然の結果として生じた回答欄の狭さは、当然ながら後日、モニター有志の方々から強い不満を表明されることとなった。

研究実行の第一段階として、センターの研究協力課は、受講モニター全員にテキストを発送する際、特別モニター200人に、オーディオ教材（90分の録音テープ2本）、料金後納封筒五通（回答用紙をセンターに郵送する際に使用する）、料金別納封筒五通（センターから添削済みの回答を返送するために使用する。これにはセンターへ回答を郵送する際、予め各自の住所、氏名を記入しておくことが求められた）、回答用紙五枚、ならびにこの研究の主旨を記し、

研究への協力を依頼する文書を同封した。通信添削問題は各講五問、三講十五問で回答用紙一枚（B5）とした。従って全十五講で五回の通信添削指導を実施したわけである。第一回目の締め切りは第三講が放送されて二週間後の9月13日とし、以下順に10月4日、10月25日、11月15日、12月6日を締め切りとしたが、実際の通信添削指導にあたっては、大滝先生の御好意もあって、送られてきたもののすべてに添削をして返送をすることとした。中には二回分、三回分を一度に郵送してくるモニターもあった。通常の通信添削指導ではすべて没になるはずのこうした回答も、実験研究という性格に鑑み、すべて受付けることとした。

モニターからの答案の郵送をうけ、センター研究協力課の次の仕事が始まる。回答用紙を集め、それを予め平松先生から頂いておいた模範解答と採点基準とともに大滝先生に送る。大滝先生はこれに基づいて、なるべく丁寧に添削指導をするとともに、右の欄にo, a, b, c, dの五段階にわけてその評価を記入し、回答用紙をセンターに返送するわけである。大滝先生から返送された回答用紙はセンター研究協力課によって右側の評価を記入した部分が切り離され、残った左側のみが模範回答とともに返送封筒に入れられ、モニターに送り返される。こうしてワン・サイクルが終了する。これを五回繰返し、この研究の実行部分が終了するわけである。評価を記入され切り離された右側の欄はセンターに保存され、後日出題の適否ならびにモニターの成績の変化、通信添削の継続状況等を研究する資料となった（比較に便ならしめるため、dを四点、oを零点に換算した。従って一回ごとの満点は60点となる）。モニターに返却する部分に評価を記入しなかったのは、それによってモニターの一部にでも、通信添削に嫌気がさす結果を将来することを恐れたからである。

V 研究結果 その一

200人の特別モニターのうち、今回の通信添削指導に参加した者は東京12人、千葉17人、埼玉10人、神奈川10人、その他7人（栃木2人、茨城4人、宮城1人）の計56人であった。これを地域ごとの特別モニター数で割れば、東京19.4%、千葉36.2%、埼玉、神奈川31.3%、その他41.2%という数字が出てくる。この結果は非常におもしろい傾向の存在を示唆している。即ち東京の参加率が一番低く、これから同心円を描いて遠ざかるほどに参加率がよくなる傾向である。千葉が例外的に高くなっているのは地元だからと理解してよかろう。何にしても東京の低さは際立っている。東京人はいそがしすぎるのであろうか。それとも文化的行事がごろごろしていてラジオの大学講座などに腰を落ち着けることなど出来ないのであらうか。

1984年度の実験放送では昨年度以前に引き続き、スクーリングも実施された。スクーリングは東京会場と千葉会場の二会場で実施されたが、今年度は一回のみとなった。これに参加した者は東京会場19人、千葉会場13人の併せて32人である。スクーリング参加者と通信添削指導参加者とを比較すると、スクーリングには参加したが通信添削指導を受けなかった者7人、両者ともに参加した者25人、通信添削指導のみ受けた者31人となる。従ってスクーリングもしくは通信添削指導のいずれかもしくはその双方に参加した者は63人ということになる。

録音テープを発送した者としなない者によるスクーリング参加率は明らかに相違している。テープを送った200人中スクーリングに参加した者は31人であったが、テープを送らなかつた37人中スクーリング参加者は僅か1人という歴然たる相違が出たのである。

15.5%と2.7%の相違は小さくないと言えよう。地域別にみると、

東京 99人中 8人，千葉 47人中 12人，埼玉 32人中 2人，神奈川 32人中 4人，群馬 10人中 2人，その他 17人中 4人という結果になる。それぞれ 8.1%，25.5%，6.3%，12.5%，23.5%となる。これも千葉とその他の地域の比率が高いことが目につく。千葉については地元であることが，その他の地域についてはモニターの熱意が，この数字を押上げたように思える。

通信添削指導に参加した者の総数は 56人，各回別では第一回 55人，第二回 47人，第三回 42人，第四回 38人，第五回 33人で，逡減してゆく傾向を示す。これは避けられない現象であろう。最終第五回に関しては，いまして時間をかければこれよりやや高い数字も出たかと思われるが（この回だけは規定通りの締め切りによった），大勢には影響なかろう。参加総数が 56人となっているのは一人中途からの参加者がいたからである。この 56人中五回通して参加した者は 32人。これ以外の 24人の参加状況は以下の通りである。

第一回から第四回まで参加	2人
第一，三，四回参加	1人
第一，二，四回参加	2人
第三，四，五回参加	1人
第一回から第三回まで参加	6人
第一，二回参加	5人
第一回のみ参加	7人

このうち第三，四，五回参加までの 6人は，恐らく時間の都合さえつけば通信添削に最後まで付き合ってくれたらろう人々と見て，まず間違いあるまい。しかしそれ以下の 18人のほぼ半数にあたる 10人については，残念ながらドロップ・アウトしたものと言わざるを得ない。特に第一回でやめた 7人の中には，回答欄に何も書かず，回答用紙に住所氏名のみ書いて送って来たものが 2名いた。そこには「私はいままで中国語を習ったことがありません。聞くところ

ろによれば『入門編』があるとか。それを送っていただけたら幸です」と言った主旨が書かれていたが、残念ながらその意向には沿いかねた。しかしなかで注目すべきは第一回0点の№4423氏が第四回まで続けたことであろう。

全五回の成績を平均点で見ると、第一回が55人で39.1点、第二回が47人で46.7点、第三回が41人で49.9点、第四回が38人で49.4点、第五回が33人で52.7点となる。第一回の参加者には回答用紙に何も書かずに提出した者が2人いたから(0を取ったものは3人だが、一人は回答の努力をしている)、実質的には40.6点と言った方が適切であるかも知れない。第四回の成績が第三回に比し若干低くなっているのは、この回の問題がやや難しかったか、採点が厳しかったかのいずれかと推定される。参加者の成績を上昇傾向ととらえるのに差し支えとはなるまい。この傾向は全五回を通して参加した32人についても言える。この32人の平均点は439, 49.2, 51.5, 50.8, 52.9と先の数字よりは若干高いものの、同じような流れを示しているのである。

成績を一覧表(附録参照)にしてみると、様々なことがわかってくる。成績の伸張具合についてはいくつかのパターンがあることに気がつく。最初から高いレベルを示しているがそれゆえにか著しい伸びを示さない者、逆に高かったものが油断からか僅かではあるが下降傾向を示す者、低いレベルであったものが努力のかいあってか急激に伸びる者等々である。このうち本人の努力と通信添削指導の効果が認められるものは第三のパターンであろう。このタイプには第一回19点から第五回53点となった№4124氏、同じく26点から50点になった№4202氏、16点から41点になった№4322氏、これほどの伸びではないが31点から52点になった№4234氏、第三回で参加をとりやめたがこの間36点から55点に急伸した№4428氏等がこのグループに分類されよう(序でながら、中途

で通信添削指導への参加をとりやめた18人の中にも、この№4428氏や第三回59点であった№4140氏、同じく57点であった№4425氏のように、到底ドロップ・アウトとは見做せない者も少ないことを指摘しておきたい。恐らくは今回の通信添削指導ではもの足りないといった理由から、参加を取りやめたものと考えられる)。

明らかにドロップ・アウトしたと思われる者が10人であることは既述の通りだが、ドロップ・アウト時の点数は25点、36点、8点、18点、39点、0点、14点、23点、0点、46点とまちまちである。これだけの資料から、およそ何点ぐらいになると通信添削に参加する気をなくすといったことは言えない。これ以下の成績を何度も取りながら最後まで通信添削を続け、かつ大幅な進歩を示した例も上記のように少なくないからである。人それぞれ個性があるように、学習における粘り強さにも相違があろう。ただこの10人の中にも、例えば8点氏のようにスクーリングにも参加した者、46点氏のように第一回目32点から第二回目46点へと成績の向上を示しながらこの回で参加を取りやめた者がいるように、適切な援助の手さえ差し伸べればドロップ・アウトせずすんだのではないかと思える人々もいるのである。こうした人達を救済する方法を見付けることこそが我々の務めであろう。

今回の通信添削参加者には大学で中国語を履修済のもの(たまたま筆者が埼玉大学で教えた学生がいた)もいたし、仲良く学習をされた老夫婦もおられた。今回のモニターの属性については後ほど公式の報告書が出ることになっているのでそれに譲るが、放送終了後開いた「懇親会」への参加者を見ると、最後まで学習を継続された方は年配の、これまで何らかの形で中国語を学習してきた方が多かったようである。そこで、以下にこの「懇親会」で出た、モニターの忌憚のない意見を記してみることにしよう。

VI 懇親会

1985年2月3日日曜日午前10時から、放送教育開発センター管理棟三階会議室で特別モニターの有志の方々との「懇親会」を持った。この会は「懇親会」とは名ばかりの、往復の交通費さえでない、まったくの有志の顔合せであったが、モニターの方々の理解を得、15名の参加者を見ることが出来たのは幸いであった。この「懇親会」は筆者の発案で企画され、平松、大滝両先生の快諾とセンター研究協力課の援助を得て、モニターにとって恐らく最も都合がよいであろう日曜日に実施されることになった（但し午後ではなく午前であったのは配慮が足らなかったと思っている）。特別モニターへの案内状の発送は最終回の通信添削指導返送時に行なわれた。ただ対象はこれに限って特別モニター全員ではなく、それまで一回以上通信添削に参加された上記56人の方に限らせていただいた。これに対する返事は参加不参加とりまぜ37人の方からいただくことが出来た。うち参加予定者は20人で、15人の方に実際に御出席いただいた。「懇親会」の参加者を地域別に見ると、東京2人、千葉8人、神奈川1人、群馬2人、茨城2人となる。午前10時の開会予定にあわせ、遠いところを片道2時間、3時間かけてやってこられたモニターの方々、特に群馬、茨城の4人の方々の熱意には頭の下がる思いでいっぱいである。

「懇親会」はまず筆者がこの研究および今回の会合の目的等を簡単に説明することで始まった。その後の多くの時間はモニターの方々と両先生との間の懇談に割かれた。テーマは学習の間に逢着した問題点を中心であったが、敢えてそれに限らず自由に語りあっていただくことを主眼とした。この内容の本研究に関連する部分については後述するが、その前に、「懇親会」参加者の協力を得て実施したアンケート調査についてまとめておこう（14人の方から返事を

いただいた)。

Ⅶ アンケート調査

アンケートは以下の九項目にわたっている。

- 1) あなたは「ラジオ大学講座中国語 講読編」の学習以前に中国語を学習したことがありますか。
 1. はい
 2. いいえ
- 2) 1) で1. はいと答えられた方に。

それは何によってですか。

 1. 大学
 2. 講習会
 3. カルチャー・センター
 4. テレビ
 5. ラジオ
 6. 中国在住
 7. その他(複数回答可)
- 3) ラジオ大学講座「中国語 入門編」をお聞きになりましたか。
 1. 最後まで聞いた
 2. 一部分聞いた
 3. いいえ
- 4) 「入門編」と「講読編」との関係についてどのように感じられましたか。具体的にお書きください。
- 5) 「中国語講読編」の構成その他感じたことを自由にお書きください。
- 6) 今回のテープを使ったヒヤリングによる通信添削指導について、感じたことをなるべく具体的にお書きください。
- 7) 「入門編」「講読編」は間もなく放送大学の正式な講座として放送されることになっています。あなたは放送大学の学生になれますか。
 1. 全科生になる
 2. 単科生になる
 3. 学生にはならないが番組は視聴する
 4. 電波の関係で学生になれない
 5. 学生にならないし、番組も視聴しない

8) 7) で1, 2, と答えられた方へ。

「中国語入門編」「講読編」をもう一度受講されますか。

1. 受講して単位をとりたい
2. 単位はいらないが受講する
3. 受講しない

9) 8) で1, 2, と答えられた方へ。

受講する理由はなんでしよう。

1. 単位が必要
2. 理解不十分なのでもう一度学習したい
3. その他

まず第一の「あなたは『ラジオ大学講座中国語 講読編』の学習以前に中国語を学習したことがありますか」という質問に対しては、はいが12人、いいえが2人であった。これは今回のモニターの多く、少なくとも学習を貫徹されたモニターの多くが中国語の既習者であったことを意味している。この12人に対して行った第二の質問に対する回答は、大学が0人、講習会が3人、カルチャー・センターが1人、テレビが8人、ラジオが11人、中国在住が1人で、うち「中国語入門編」で学習した者は、最後まで聞いた者7人、一部分聞いた者1人であった。この結果は今回のモニターには複数の方法で中国語を学習した者が多いこと、その方法はテレビ、ラジオといった放送メディアが中心ではあるが、講習会、カルチャー・センターといったフェイス・トゥ・フェイスの授業の体験者も少数ながら存在していること、一方大学で中国語を学んだ者が恐らく少数であることを示唆している。もちろんこれだけの数字から何事かを結論づけようとするのは危険であろうし、その意味もあるまい。しかし最後まで学習を継続するだけの熱意を持った人の中に、大学で中国語を学んだ者が少なかったことは注意しておく必要がある。大学で学んだものの語学力が必ずしも高くないことは筆者の身をもって知るところである。それゆえここには自らも大学で中国語を学びかつ教えた者として、考えなければならない問題点が含まれてい

るように思えるのである。

次に4) 5) 6)をとばし、「懇親会」参加者の放送大学への入学の意志及び放送大学の中国語の講義を受講する意志並びにその目的を聞いた7)8)9)について先に見てみることにしよう。

7)の放送大学の学生になる意志については、全科生となると答えた者3人(但し特修生からとする者1人を含む)、単科生、選科生になると答えた者6人、学生にはならないが番組は視聴すると答えた者5人という結果がでた。してみればこの「懇親会」に参加した有志は放送大学の予備軍に限り無く近いものと見做して差し支えなさそうである。なお茨城の勝田の方が2人(夫妻)おられたが、そこにも放送大学の電波は届くとのことであった。放送大学の電波の受信可能地域そのものも、パンフレットに描かれているものとは些か食い違いがあるようである。

「中国語入門編」「講読編」に対する受講意志を聞いた8)に対しては受講して単位を取りたいとする者5人、単位はいらないが受講するとした者4人であるが、7)で学生にはならないが番組は視聴するとした者のなかにこの単位はいらないが受講するとした者が3人いるから、何らかの形で中国語を再度学習したいとするものが12人いたことになる。受講する理由としては単位が必要とする者が2人、理解不十分なのでとする者が8人いたが、その他として、中国語に慣れるため(絶えず接触したい)、テストを受けてみたいといった理由もあげられていた。こうした方々はかなりの上級者と考えられる。「地方に住んでいると中国語を学習する機会は誠に少なく、あらゆる方法を研究して学習に励むことは極めて必要である。放送大学によって学習の機会均等が与えられ、本当に感謝している。単位を取ることよりも生の中国語に触れることが大変嬉しいと感じている」という方がおられたが、これは放送大学にとって何よりの励ましの言葉と言ってよかろう。

Ⅷ 「中国語講読編」とオーディオ教材について

4) 「入門編」と「講読編」の関係については「急に難しくなった」という声が一般的で、7人が同じ趣旨のことを書いていた。「入門編は楽しく、講読編は聞き取りが出来なくて苦労しました」といった意見もこれに含めて差し支えあるまい。こうした「講読編」の急激なレベル・アップに対し、モニターの意見は極めて自省的であり、「自分の力不足」「聞き取りが未熟」「入門編のときの勉強が足りなかった」とする者が多かった。しかしこれは文字通り受け取るべきではなく、「入門編」「講読編」の間に横たわるギャップを埋める努力が求められていると言ってよかろう。「入門編と講読編の間に講義しなくてもいいから副読本といったものがあれば講読編の学習に役に立ったかなどと考えた」というモニターの言葉には傾聴すべきものがある。5) の構成については「テキストの最後に総まとめ的なものがほしかった」「放送の最後にまとめで何か一つ欲しかった」「時間のわりに量的に多い感じがした」という意見があった。今回の番組は聞き取りに力を入れ、ネイティブ・スピーカーに繰り返し繰り返し読んでもらった。ために時間不足に陥り、各講の最初と最後にまとめの時間をとることが出来なかったようである。この点が今後の課題として残ったかもしれない。

通信添削指導については「非常に良かった」「適切な指導を戴き、大変勉強になりました」「初めは回答の要領がわからなかった。回を追って添削を見て段々とわかりました。大変だったと思います」「目でわかったつもりでも耳で聞き取れない事が多いのでとても勉強になった」「問題を聞き取るのが大変で、カナを使ってノートに書き、分る言葉を埋めていったが、分らなかった言葉を辞書でみつけた時はとてもうれしかった。文字で書かれた問題に答えるよりずっと勉強になった」といった言葉が目についた。お世辞半分にし

ても、我が意を得たような気がして嬉しかったのは事実である。

Ⅸ 調査結果 その二

2月3日の午後、「懇親会」に引き続いて平松、大滝両先生と大塚とで今回の通信添削指導の結果について分析するための会を持った。今回の通信添削指導の各設問ごとの成績については附録に見る通りである。これによれば全体的な流れ、即ち低得点から回を追って高得点になってゆくといった傾向のほか、各回ごとに一、二問ずつ他に比して得点の低いものが見出だせる。例えば、第一回の第10問、第二回の第14問、第四回の第15問等である。これらの設問は、各講五問ごとの出題の終わり近くに位置することをその大きな特徴とする。この点からも伺われるように、問題がそれ以前の基礎的なものに比べ一捻りも二捻りもされている場合が多い。具体的に言えば回答を二つ要求したり、質問形式が否定形であったりするのである。こうした質問の仕方は、講師として非常に魅力を感じずるものであり、真の理解度を試すには是非とも必要なものであるが、基礎的能力の獲得を試すことを目的とするのであればなくもがなの感が否めなくもない。聞けば放送大学の講義において単位を認定する場合、成績は優良可不可でつけるというから、これもやむを得ないかも知れないが、一考を要するように思われなくもない。少なくとも質問形式に工夫が凝らされることは必要であろう。今回通信添削に回答された方々は、200人の特別モニターの四分の一強の56人であり、最後までこれを続けられた方は更にこの6割にも満たない32人とどまる。しかも上で分析したように、この32人の方々の多くは腕に覚えのある方々であった。そうした方々にしてなおこのような結果がかなり強くでるということは、やはり考えておかなけれ

ばならない問題であろう。

放送大学における中国語の単位認定試験がどのような形で実施されるかは、平松先生のお気持ち次第なのだが、伺ったところでは、第八週に実施される通信指導は別として、やはりコンピュータによるマーク・シート方式によるものではなく、通常の筆記試験を考えていらっしゃるようである。だがこれには採点をいかに短期間かつ公平に実施するかという大問題が付きまとう。お一人で採点されたのでは時間の点に問題が起ころうし、複数の採点者によったのでは公平を期せまい。しかも放送大学の受講者はこれからも増え続けてゆくであろうという恐らく確かな推測もある。とすれば中長期的にはやはりコンピュータを利用したマーク・シート方式の問題に切り換えてゆかざるを得ないのではあるまいか。とすれば、ここ数年間は通常の筆記試験でゆくとしても、次のステップを見据え、そのための実験ともなるようなことをこの間にしておく必要がある。マーク・シートにのるような問題の開発がそれである。中国語には中国独自の簡体字の問題があり、コンピュータには適さないとはよく言われる。しかしこれは単に金だけの問題であって、すこしも根本的な問題ではないのである。漢字ではなくローマ字（ピンイン）で質問することも出来るわけだし（語学の能力を専ら試験するとしたら、むしろこの方が好ましいとさえ言える）、簡体字を使って質問するにしても高々百前後の簡体字をコンピュータに覚えさせればすむことである（偏や旁の簡化についてはその原則をコンピュータに覚えさせればよいものとする）。従ってその費用とて高の知れたものに過ぎない。もし人手をかける、いなかけられるのであれば、むしろ試験にヒヤリングを導入し、その採点にでもかけるべきもののように思う。英仏独にマーク・シートの問題が出来、中国語に出来ぬはずもあるまい。この問題は早急に取り組んでゆかなければならない根本的な問題と筆者は考えるものであり、応分の協力も

惜しまないつもりである。今回の通信添削指導の実験はこれに対し、貴重な経験を与えてくれたのである。

X まとめ

今回の実験放送では通信添削指導とスクーリング（面接授業）が実施された。この両者の他に放送大学の講義を構成する可能性のある教育方法としては、1983年度に「中国語 入門編」の実験放送当時実施されたテレ・カウンセリングが考えられよう。しかし、電話による学習相談は一件もなく、実質上放送大学の学習センターで行う学習相談に近いものとなっていた。ただし学生が各学習センターに張り付けられる現在の放送大学のシステムからすれば、もしこれを実施するのであれば、各センターに一人ずつ中国語の専任を置かなければならないことになる。これは事実上不可能である。電話を主任講師の勤務時間にかけるということにすればお一人でも可能は可能なのだが、これはどうも日本の風土に合わないようだし、第一主任講師に負担がかかり過ぎよう。となれば面接授業の強化ということになるのだが、安易にこれに頼ることは、人手、学習センターの教室といった派生的な問題の他、放送大学の存在意義そのものに関わる本質的な問題を提起しかねない。このことは最初に述べた通りである。やはり放送教材、印刷教材の強化を以てこれに対処してゆくしかなさそうである。しかしそのうえでモニターの一人がいみじくもおっしゃった「昨年の実験放送に比べ、スクーリングは減るし、学習相談はないし、よいところが一つもなくなってしまった。」という言葉は常に心にとめておく必要がある。

今回の試みでは実験放送が短波という媒体によって放送されている事情を考え、番組中に繰り返し流された本文部分も録音することとした。このため当初の90分テープ一本の計画が二本となってし

まった。しかしこれはFMの電波を使って実施される本放送においては無用とも言える配慮であった。従って45分テープ一本にまとめることも十分可能と考える（FMの聞こえない地域の方が個人的にテキストとテープによって学習をするのであれば、この部分を残しておくことは大いに意義が有ろう。こうした方々を対象として放送大学教育振興会がテープ教材を販売することは別に考慮されてよかろう）。また映像教材として、ビデオを使用し、入門段階の学生に中国語独自の発音を、ネイティブ・スピーカーの口元を映すことによって学習させるということも考えられる（テープは各学習センターに備えておき、出来ればダビングも認める）。モニターのお一人が言っていたように、副読本を考えるのも一法であろう。今回の試みはこうした様々なことを我々に考えさせてくれた。この点で大変ありがたい試みであった。なおこの研究に当っては放送教育開発センター研究協力課の課員の方々の多大な援助を得た。記して感謝の意を表するとともに、こうした企画の実施をお認めくださった放送教育開発センターに感謝をいたしたい。

昭和六十年三月執筆，同七月補訂

中国語講読編通信添削参加者一覧表

その一

	番号	住 所	1回	2回	3回	4回	5回	スクーリング	懇親会
1	4106	足立区	47	56	52	55	59	東 京	参 加
2	4115	練馬区	49	38	41	×	×		
3	4121	東久留米	25	×	×	×	×		
4	4124	練馬区	19	26	40	34	53		
5	4140	中央区	56	52	59	×	×		
6	4144	港 区	45	43	48	49	51	東 京	
7	4147	三 鷹	50	57	57	53	56		
8	4153	荒川区	51	48	45	50	50		
9	4155	江東区	44	51	48	51	52	東 京	参 加
10	4156	北 区	48	53	×	×	×	東 京	
11	4160	新宿区	46	×	×	×	×		
12	4161	新宿区	39	49	51	×	×		
13	4201	柏	48	57	55	53	52	東 京	参 加
14	4202	千 葉	26	40	47	42	50		
15	4206	柏	39	48	×	×	×	千 葉	
16	4207	松 戸	38	×	35	48	×	東 京	参 加
17	4214	千 葉	36	×	×	×	×		
18	4215	船 橋	47	56	49	55	56	千 葉	参 加
19	4217	千 葉	41	47	50	46	52	千 葉	
20	4220	船 橋	47	51	48	57	59	千 葉	参 加

中国語講読編通信添削参加者一覧表

その二

	番号	住所	1回	2回	3回	4回	5回	スクーリング	懇親会
21	4226	千葉	45	52	51	48	52	千葉	参加
22	4229	松戸	50	50	52	58	54	千葉	
23	4234	松戸	31	50	50	49	52	千葉	参加
24	4237	千葉	45	57	54	55	52	千葉	参加
25	4239	千葉	53	49	51	58	54	千葉	参加
26	4240	船橋	39	43	×	53	×		
27	4241	柏	46	51	×	52	×		
28	4242	船葉	×	×	50	43	46		
29	4245	市原	51	55	57	×	×		
30	4302	所沢	49	60	60	53	55		
31	4305	浦和	8	×	×	×	×	千葉	
32	4310	川越	42	48	47	42	54		
33	4320	浦和	55	52	54	50	53		
34	4321	草加	18	×	×	×	×		
35	4322	草加	16	19	44	36	41		
36	4324	浦和	38	42	39	×	×		
37	4328	東松山	49	53	60	56	49		
38	4329	大里郡	0	×	×	×	×		
39	4332	戸田	28	14	×	×	×	東京	
40	4405	緑区	43	56	54	59	55		

中国語講読編通信添削参加者一覧表

その三

	番号	住 所	1回	2回	3回	4回	5回	スクーリング	懇親会
41	4407	港南区	33	23	×	×	×		
42	4410	神奈川区	39	50	50	43	47		
43	4411	川崎多摩	42	50	53	51	51	東 京	参 加
44	4414	金沢区	0	×	×	×	×		
45	4416	旭 区	32	46	×	×	×		
46	4421	横須賀	49	53	49	50	56	東 京	
47	4423	小田原	0	8	16	9	×		
48	4424	南 区	47	55	53	56	56		
49	4428	金沢区	36	49	55	×	×		
50	4505	前 橋	53	32	55	46	50		
51	4507	桐 生	49	53	53	54	52	東 京	参 加
52	4510	沼 田	50	47	60	53	57	東 京	参 加
53	4703	水 戸	54	56	56	55	55	東 京	
54	4709	勝 田	41	50	52	53	55	千 葉	参 加
55	4710	勝 田	39	50	50	54	53	千 葉	参 加
56	4801	宮城県	44	52	47	38	×	東 京	
			39.1	46.7	50.0	49.4	52.7	25	15

第一回中国語通信添削指導回答分析

回答者55人

	0点	1点	2点	3点	4点	総得点	平均点
1	5	3	3	3	41	182	3.31
2	15	1	2	15	22	138	2.51
3	7	6	25	11	6	113	2.05
4	4	3	11	18	19	155	2.82
5	9	3	17	9	17	132	2.40
6	7	7	1	11	29	158	2.87
7	6	0	3	36	10	154	2.80
8	8	1	6	10	30	163	2.96
9	7	6	3	14	25	154	2.80
10	12	13	27	3	0	76	1.38
11	5	5	7	18	20	153	2.78
12	7	3	14	10	21	145	2.64
13	6	3	7	23	16	150	2.73
14	6	1	9	14	25	161	2.93
15	11	5	9	25	5	118	2.15
合計	115	60	144	220	286	2152	39.13

注) 句読点がないのですべて1点引という答案が4通あるが、上の集計ではこの指示は無視した。また何も書いていない答案が2通ある。これらは通信添削に参加する意図のないものであるから、上の数字は参加者53人、平均点40.60とすべきかも知れない。

第二回中国語通信添削指導回答分析

回答者 47人

	0点	1点	2点	3点	4点	総得点	平均点
1	1	7	4	5	30	150	3.19
2	3	1	16	6	21	135	2.87
3	1	1	4	4	37	169	3.60
4	4	0	1	15	27	155	3.30
5	1	1	2	6	37	171	3.64
6	1	0	2	37	7	143	3.04
7	4	0	2	0	41	168	3.57
8	6	0	3	17	21	141	3.00
9	0	2	2	3	40	175	3.72
10	8	3	6	13	17	122	2.60
11	5	2	1	6	33	154	3.28
12	6	0	5	5	31	149	3.17
13	6	0	5	19	17	135	2.87
14	13	2	27	2	3	74	1.57
15	6	0	3	5	33	153	3.26
合計	62	19	83	143	395	2194	46.68

第三回中国語通信添削指導回答分析

回答者42人

	0点	1点	2点	3点	4点	総得点	平均点
1	0	2	3	1	36	155	3.69
2	0	1	3	5	33	154	3.67
3	0	4	6	3	29	141	3.36
4	1	3	1	1	36	152	3.62
5	1	2	2	5	32	149	3.55
6	1	0	3	26	12	132	3.14
7	15	0	5	4	18	94	2.24
8	4	0	1	1	36	149	3.55
9	2	3	4	9	24	134	3.19
10	7	3	6	4	22	115	2.74
11	2	0	9	4	27	138	3.29
12	3	0	1	6	32	148	3.52
13	2	0	0	3	37	157	3.74
14	2	1	5	19	15	128	3.05
15	1	0	1	8	32	154	3.67
合計	41	19	50	99	421	2100	50.00

第四回中国語通信添削指導回答分析

回答者 38 人

	0点	1点	2点	3点	4点	総得点	平均点
1	1	0	8	0	29	132	3.47
2	2	2	4	2	28	128	3.32
3	2	0	0	4	32	140	3.68
4	0	1	5	20	12	119	3.13
5	2	0	1	5	30	137	3.61
6	3	0	0	4	31	136	3.58
7	15	0	0	7	16	85	2.24
8	0	2	0	7	29	139	3.66
9	4	0	1	19	14	115	3.03
10	1	0	7	4	26	130	3.42
11	0	0	9	5	24	129	3.39
12	1	0	3	5	29	137	3.61
13	1	0	1	3	33	143	3.76
14	1	0	2	1	34	143	3.76
15	13	2	9	12	2	64	1.68
合計	46	7	50	98	369	1877	49.39

第五回中国語通信添削指導回答分析

回答者33人

	0点	1点	2点	3点	4点	総得点	平均点
1	0	0	1	4	28	126	3.82
2	3	1	5	1	23	106	3.21
3	0	0	0	1	32	131	3.97
4	2	0	3	7	21	111	3.36
5	0	0	1	13	19	117	3.55
6	0	0	1	16	16	114	3.45
7	0	0	0	8	25	124	3.76
8	1	0	0	2	30	126	3.82
9	3	0	0	5	25	115	3.48
10	2	1	0	13	17	108	3.27
11	0	0	0	7	26	125	3.79
12	0	0	4	16	13	108	3.27
13	0	0	2	3	28	125	3.79
14	4	0	1	17	11	97	2.94
15	2	0	0	19	12	105	3.18
合計	17	2	18	132	326	1739	52.67